

～生誕200年を記念～

ショパンを語ろう

フランス語の語感を感じる

ピアニスト 黒田 ゆかさん



「音の融合がすばらしい『幻想ポロネーズ』はレパートリーとして持ち続けたい曲のひとつ」と語る黒田さん

「ショパン作品の中に、私はフランス語の語感を感じます」。ピアノ教室「コンセル・イグレット」を主宰するピアニストの黒田ゆかさん（平針南）はそう言います。

ショパンは人生の後半をフランスで過ごし、円熟期の作品の多くはパリで生まれました。黒田さんも10年ほど前まで6年続けてフランスで夏を過ごし、ショパンの流れをくむ奏法を学びました。「フランスには彼の信念や技法が色濃く受け継がれています」。またその

今年、ショパン生誕200年。世界各地でショパンにちなんだ催しが行われているといます。ショパンといえば、美しいピアノの音色が印象的。「やはり、（こ）はこの町の演奏家にそれぞれのショパンへの思いを語ってもらいたい」と企画した今号の特集「ショパンを語ろう」。ほかに、調律師や、ミニコンサートを開くカフェのオーナーにもお話をうかがいました。春の良き日、クラシックに浸ってみるのはいかがでしょう。

奏法についても「ピアノ」サートを開いた黒田さん。ルツ第2番「華麗なる円は身体を使って弾くもん。」「軽やかさを求め、舞曲 変イ長調を選び、呼吸法と手首の柔軟 軽やかなタッチに挑むために行き着いたテーマが 華やかな雰囲気の中に、性は特に大切にしたい」と熱く語ります。現在は幕を閉じました。もあるようです。

2004年12月には、ワルツでした」。3拍子、リズムにちなんで、力を入れています。現在、門下生の指導に「ショパンワルツ全19曲」を奏でると題したコンサートには、ワルツは3部構成に、電中の演奏活動は今後、w.musicistaisson.com/co http://www.nert-y/

フィナーレの曲には、ワルツが尊敬していた